

辞書は1冊あれば十分と思っていた。それでもより多くの語が引ける中型も置いて万全と安心していた。その後、辞書によって説明が異なる、特色があるということに耳にしていたが、本書がその全容を示してくれた。納得した。著者がさわ氏は辞書蒐集・研究者とあるが正体不明の方のようだ。

辞書には9万語くらいの小型、30万語くらいまでの中型、50万語クラスの大型がある。本書では本年3月現在、新刊で購入可能な一般向け国語辞書の大中小合わせて22冊を取り上げている。所有の辞書がどう評価されているのか気になるところだ。

「なぜ辞書を1冊引くだけでは足りないのか、解き明かしてまいります」と著者は言う。読み進めると、目的別にベストな1冊の紹介、各事典の得意分野、辞書に載らない言葉などなど、興味は尽きない。例が豊富で違

比べて楽しい 国語辞書 ディープな読み方



ながさわ 著
1562円 河出書房新社
☎03-3404-1201

いや特色が分かり面白。日常使用する語を取り上げ、各辞書の表記を微細なところまで比べ、著者の意見や感想も入り、正にディープに味わえて楽しめる。

気になることがある。本書名は『国語辞書』だが、取り上げた小型辞書の書名は全て『国語辞典』であり、『辞書』ではなく『辞典』であること。手元の『広辞苑(6版)』では「辞書」は「言葉や漢字を集め、一定の順序に並べ、その読み方・意味・語源・用例などを解説した書。辞典」とある。「辞典」は「辞書に同じ」とある。同じことか？別の小型辞書の「辞典」には「多く辞書の書名に使う」とあり、書名に使うのかと一応納得。早速辞書の引き比べをしたが、著者の解説を聞いてみたい。

(教育調査研究所・寺崎千秋)



子ども・若者の自立、つまり「子どもから大人への移行」を支援することだとする。そして、日本の子ども・若者が直面している課題に対応する仕組み・構造について、包括的な「第三の領域」、支援する専門職、学問領域、支援における権利の理解が共に欠けていると言う。

本書は、「第三の領域」と「社会教育的支援」の観点として、①社会福祉、臨床心理学、キャリア教育、職業訓練などの領域と関連づけた構造的把握、②個人の自主性、自発性に基づく自由で自立を志向する学びや活動を重視する自発性理論を基本的価値とする自己・相互学習、③子ども・若者問題を個人の問題に矮小化しない集団

生田周二 著
2640円 かもがわ出版
☎075-432-2934

子ども・若者支援の パラダイムデザイン “第三の領域”と専門性の構築に向けて



的・地域的志向性、④支援には統制的・教化的傾向性などの問題があるという理解・把握などを挙げる。

「専門性を構成する専門的能力」としては、ナレッジ(知識) 社会制度や資源、子ども・若者に関わる問題についての知識、スキル(技能) 課題に向かうための技能、マインド(価値観) 活動を支え、方向づける基盤となる理念・思想・哲学、センス(感受性) 社会的ニーズを発見するなどの感受性、の4要素を設定する。

著者は、学習支援、生活支援、就労支援など特定の分野に偏ることなく、支援をする上で、「共通基礎」として備えるべき「専門的能力」の必要性を主張している。評者は、今後の学校教員にも、その専門性の発揮は「本務」の一環だと考える「社会教育士」資格を有する教員の拡大などの潮流に期待したい。

(前聖徳大学教授・西村美東士)